まちづくりネットワーキングえひめ

舞たうん

VOL 80
2004.4

アングル
アメリカから見た日本女性とまちづくり　新居浜市／伊藤バーバラ　…… 1
特集　『女性グループの視点でまちづくり』
おかみさん活動について
立ち止まることなく街に風をおこし続けて　今治市／西原佐和子　…… 2
安心、安全な食材で全国に特産品をアピール　岩城村／西村　孝子　…… 4
I　LOVE　赤煉瓦　大洲市／藤田　禮子　…… 6
生きがいとなった地域おこし　松山市／河野　享子　…… 8
地域に生きる　新居浜市／鴻上千恵美　……10
キラリ光るまち
恵庭市恵み野花の街から　北海道恵庭市／内倉真裕美　……12
論談ーまちづくりー
農村女性とツーリズムビジネス　熊本県人吉市／本田　節　……14
地域づくり・まちづくりに想う　調査役　藤井　和郎　……16
トークナウ
ワークショップ　松山市／石丸　英章　……18
スタート　砥部町／松田　啓司　……19
媛のかわら版
えひめのがんばるママの応援団!!（その２）　松山市／山本由美子　……20
ＭＹ　ＴＯＷＮうぉっちんぐ　歩キ目デス＆足ラテス
土木遺産に光を！…大洲市と西条市の場合　岡崎　直司　……22
平成15年度地域づくりコーディネーター育成研修会報告　……24
研究員卒業レポート
思いをもった地域住民に　前研究員　橋岡　勝一　……26
information　センターからのお知らせ ＆ BOOK INFORMATION ……28

特集
「女性グループの視点でまちづくり」

地域社会において、生活に密着した女性ならではの発想は、まちづくりをしていく上で必要不可欠なものになってきています。その中でも、女性グループの活動は、まちを元気づける力として大変注目されています。

県内でもたくさんの女性グループが活発に活動しており、また自分達の活動がまちづくりにつながる機会も求めています。

そこで、今号では「女性グループの視点でまちづくり」をテーマに、地域の中で、さまざまな取り組みをしている方々に登場してもらいました。

みなさんに地域の元気のもとを感じて頂ければと思います。

（Ｓ・Ｏ）

表紙の言葉

山歩きの醍醐味は、自然の恵みを満喫出来る事。私も花に導びかれて挑戦。カタクリの花の群生です。

一泊して早朝のカタクリの蕾みが弾く様子を見る為なのに、途中コースアウトして、誰一人付いて来ない不安。

一番乗りのつもりが群棲地には人の山。清楚な花の姿に感激は一入。美しさをきっと一人占めにしてたでしょう。ブナ林の風が快い。

新居浜市カタクリの花
柳原　あや子

アメリカから見た日本女性とまちづくり

伊藤　バーバラ

母国アメリカから初めて日本を訪れたのは今から二六年前のことです。小学校の時からずっと日本のことに興味を持ち、大学でアジアの宗教、特に仏教を勉強しました。大学院の博士課程では文化人類学（日本社会）を専攻しました。日本のことを勉強しているとき、友人のご縁で愛媛県新居浜市が研究場所となりました。

二六年前といえば、日本企業の経営法がアメリカで大ブームになっていました。工業都市新居浜に住みながら大企業の経営を研究しようと、日本へ出発しました。日本に着いてからは、毎日が驚きの連続でした。

特に驚いたのは女性でした。日本女性は家事や子育てで忙しく、一日の殆どを家で過ごしていると思っていました。しかし実際に住んでみると、街中で女性の姿が目に付きました。バイクを乗り回す女性、お店で働く女性、営業にまわる女性、喫茶店で集まって話す女性たち。この町は男性より女性の数がはるかに多いのではないかと思いました。次第に女性の活動に興味を持つようになりました。特に私が想像もしていなかった女性による中小企業経営には深く感心し、研究テーマとすることに決めました。

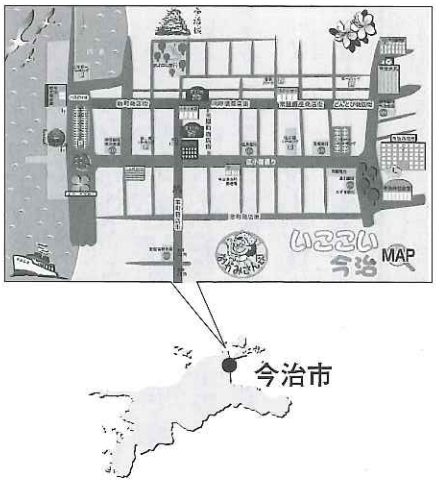
人類学では実際に社会に飛び込み、そこで暮らしながら、人々の話しを聞いたり、質問をしたりする研究方法が基本となります。二年半、女性の生活と活動を調べました。その後アメリカに戻り、大学で日本について教え始めました。

その当時、「まちづくり」という表現はまだ使われていませんでした。今アメリカで話題になっている“community building”（地域社会・共同社会づくり）もその頃あまり聞きなれない言葉でした。しかし、両国共に、住みよいまち・地域・社会をどう作れば良いかという考え方を発達させてきました。福祉関係の活動や研究を九〇年以上行っているアムハーストH・ウァイルダー財団（米国ミネソタ州）によると、「まちづくり」にはいくつかの重要な点があります。まず、町の人たちを結ぶ強い人脈があること。町に団体がたくさん存在すること。そして団体に参加する市民は目的設定ができ、一緒に活動し、目的を達成する事ができること。つまり強いリーダーよりも「まちづくり」に必要なのは一般市民の人間関係を活かす力・目的意識・そして協調性です。

一二年前から再び新居浜に住んでいますが、日本女性を研究していた頃も、今も、日本女性はまちづくり活動に特に向いていると私は思います。何故なら、協力的で人付き合いが上手な日本女性は、まちづくりに必要とされる特質を持っているからです。一方、アメリカでは個人主義が尊重され、自立心の強い人が成功すると考えられています。そういったアメリカ人がグループを作っても協力し合うことは難しいことです。今の時代こそ、まちづくり活動に必要とされるのは、日本女性が持っているこういった特質であると思います。

立ち止まることなく 街に風をおこし続けて…

今治市
今治商店街おかみさん会
会長　西原佐和子



今治商店街おかみさん会は、平成一二年一一月二九日に設立、会員六〇名で発足いたしました。設立のきっかけは、平成一一年五月に開通した来島大橋の架橋効果を見込んだ郊外の大型店ワールド・グランフジの進出、そしてニチイの郊外への移転が続いた事、又、港から栄えた商店街でありながら、橋が架かったため、港を利用する車や人の急激な減少の影響が、即、商店街に現れた事などでした。

商店街活動は男性に任せ、商売、家事、育児に追われ、外に目を向ける余裕のなかったおかみさん達が、やっと目覚めたのです。

発起人の呼びかけに賛同した六〇名のおかみさんが集まり、市役所の商工労政課のご指導の下、半年近く意見交換の会合を重ねた後、設立にいたりました。

発会式には、今治市長、商工会議所会頭にもご臨席を頂き、又、全国おかみさん会会長の、冨永照子さまの講演もお願いできまして、勇気！やる気！元気！のパワーを頂きスタートしました。

私達の会の目的は、中心商店街の振興のための事業の推進は勿論ですが、会員相互の意見交換や共通の意識を持つことにより、親睦を図る事も大切な目的です。

設立から三年余り、女性の観点で商店街を見、女性に出来る事を実行しようと考えながら活動をしてまいりました。

最初の活動は花でもてなす潤い空間づくり、の一環として、商店街に花壇を造り、アイビーのハンギングバスケットを吊るしました。季節ごとに花の植え替えをして、街に潤いと季節感を持たせるように心がけています。

又、年間四～五回行われる商店街のイベントにあわせて、「おかみさん茶屋」を開催し、お客様は勿論、商店街の皆様にも多いに喜ばれていると自負しております。時節に合わせた商店街の景観づくりのため、お正月、ひな祭り、端午の節句、七夕、クリスマスの飾り付け等を、男性の協力を頂きながら続けています。クリスマスの特大ツリー（高さ約三・五m）の飾り付けと点灯式には、市内の幼稚園児を招待して一緒に飾り付けをし、点灯式を行います。その後、ツリーの前でクリスマスの歌や踊りを披露してもらって、一足早いクリスマスプレゼントをします。

その他、商店街の空き店舗対策として、四箇所の空き店舗にシャッターアートを完成させました。広く一般に公募し、応募してくださった高校生のグループや社会人の皆様による素晴らしい作品が完成

女性グループの

し、街を歩く人々の目を楽しませています。

又、今治に来てくださったお客様に商店街周辺の飲食店を紹介する為、「いここいグルメマップ」を制作し、会員店は勿論、駅や港などの公共施設に置かせていただいています。

以上のような事業活動のほか、一年に二度、先輩おかみさん会や女性部の元へ、視察研修にうかがい勉強させていただいています。その時に得たヒントを基に活動につなげることもあります。

今治おかみさん会は、現在五三名で活動しています。会員を五班に分け、各班の理事が意見をまとめ、月に一度開催する理事会で持ち上がってきた意見を審議するなど、運営面でも全員参加を目指しています。

又、イベントや事業の終了後には、親睦を兼ねた反省会を開催します。忌憚のない意見の交換により、次の活動の改善策を見付けられたり、仲間意識を強くする最良の方法だと思っています。

クリスマスの飾りつけ

一昨年の一〇月一日に開いた商店街のホームページ、「いここい今治」に、おかみさん会のホームページ、「いここい日記」を立ち上げましたが、最初はパソコンに触れたこともなかった会員が、積極的に勉強会に参加し、今では画像入りの書き込みも出来るようになり、商店街の情報発信に一役かっています。

愛媛県内の商店街では、おかみさん会、又は、女性会の名で九団体が活動をしていますがその多くは男性の組合の中の女性の部として活動しています。私たちは単独で活動していますので、自分たちの意見や考えを、即行動に移せることが会員の頑張りの基になっていると思います。設立以来、背伸びすることなく自分たちに出来る事を実行し、街に風を起こし、立ち止まる事を一番警戒しながら進んでまいりました。現在では、商店街の人にも徐々に認められ、活動の手助けをしてくださる事も多く会員一同喜んでいます。これからも会員同士のコミュニケーション、商店街の皆様との話し合いを持ちながら活動を続け目的につなげたいと思います。

現在の活動は、おかみさん会会員店PRマップを作成しています。商店街へのアクセスマップや商店街のイベント、おかみさん会のイベント等、情報満載で四月中旬の完成を目標に頑張っています。

最後に、私のモットーとしている言葉を記します。

・動いている商店街は手の届く所に目標を置いている

・一個ずつクリアーする事により達成感を得られ次のエネルギーになる

・皆で話し合えば皆で頑張れるし、一生懸命動いていると同意した人が集まってくる

ある会合での　講師のお話より

シャッターアート

安心、安全な食材で全国に特産品をアピール

岩城村
でべそおばさん
西村　孝子

〝でべそおばさん〟て？、もしかして、差別用語かも？でもあえて私達この言葉を使います。つまり、目立ちたがりやで何にでも首をつっこんで、まさしく、「有言実行」結成して七年になります。

私の生まれは、広島県の県北、山の中、海などには縁が無かったのが、福山市の高校で主人と知り合い二七年前主人の故郷の岩城村に帰りました。見渡す限り海ばかり、泳げない私にとっては、何の魅力も無い心細い生活の始まりでした。

毎日、悶々とした日々を過ごしていた時に、グループの先輩から「生活研究グループに、入らないか？」と誘われ、入会したのが、グループの活動の始まりです。

当初は、自家消費用の山菜、柑橘類の加工、味噌作りと、直接生活に役立つ物ばかりで、とても興味を持って取り組みました。そんな中、平成三年に地区の研修大会で、「二一世紀に向けて魅力ある島をクリエイトしよう。」というテーマで話し合いが持たれ、まずは、特産品作りに取り組もう。そこで岩城村の特産品であるレモンを使った特産品を開発することになり、ポプリ、入浴材等々試作研究しているうちに、ある日、お年寄りの一日宅寮所の給食作りを請け負い、その中の献立にデザートとして白玉団子を塗って出したレモンカードがとても好評で、もしかして商品化できるのでは？と思い付き、色々試行錯誤し、平成五年に「れもんはーと」と、ネーミングし、一本五〇〇円で販売を始めました。

平成七年には、食アメニティーコンテストに応募し見事入賞し、農村開発企画委員会理事長賞を受賞、グループ員と共に初めて東京に行ったのが昨日のように思い出されます。加工技術には、自信が有る私達には、販売となるとそうはいきません。販路の確保にあちこち歩き廻り

でべそおばさん

女性グループの

岩城小６年生

岩城小５年生

ました。でも、一番効果があったのはマスコミでした。お蔭様で年間五〇〇〇本販売することができ一応企業化しています。

更なる飛躍を求め次なる商品を開発しようと研究中、平成一〇年に地元の食材を使ったメニューで応募する食文化コンテストに応募すべくレモンを使った献立「レモン懐石」を発案応募したところ、又も入賞、農林水産省流通局長賞を受賞、グループも本当に忙しくなってきました。

れもんはーと、レモン懐石共、でべそおばさん、の母体である、生活研究グループの活動です。でも、多くのグループ員は表に立って派手に活動するのは元々の活動の趣旨にふさわしくないと言い出して段々離脱していきました。そこで、ここに来て、やりたい人が、やりたい事が出来るグループを、いつまでも仲良しグループでは発展がない事に気付き、「この指とまれ」で出来たグループが、でべそおばさんです。今は三人で、地元で採れたひじきを使った、ヒジキソボロ、干し大根で作る「ばりっこ」と言う漬物等、オリジナル商品も開発し商品化しています。母体の活動も平行して行っています。

今、グリーンツーリスムの体験学習の一環で「れもんはーと」は、地元の小学生を受け入れ、又、レモン懐石は、県内外、昨年は二五〇人余りの体験者を受け入れました。中でも地元の小学生が体験に来てくれたのは、とても嬉しいことでした。小さい時から地元の食材にふれて安心・安全な食文化を継承して欲しいものです。

香川県体験交流

I LOVE 赤煉瓦

大洲市
おおず赤煉瓦倶楽部
藤田　禮子

明治三四年に大洲商業銀行本店として創建されたおおず赤煉瓦館は、平成三年にふるさと創生事業の資金をうけて再整備され風格ある姿を今に残しています。

当時は市職員により管理されていましたが、平成九年に「民間の自由な発想で管理・企画・運営を」との委託を受け、女性ばかり八名がおおず赤煉瓦倶楽部として活動をしております。私達自身、大洲に住んでいながらこの建物の事を何ひとつ解っていないことに強いショックを受け、同時に赤煉瓦の建物のもつ温かみに安らぎを覚え、この空間を大切にしたいという思いが芽生えました。まずは環境づくりからと、地域のボランティアの方々の協力を得て外庭に枕木を配し、イングリッシュガーデンのイメージで芝生やハーブを植えました。また中庭には、欅の梢が、芽生えから落葉まで折々に違った表情で訪れる方々にゆとりの心を思いおこさせ、安らぎの空間となっています。

平成一〇年には、煉瓦建築の魅力を理解し、共感していただきたいとの思いから、資料室「れんが工房」を完成することができました。県内外の煉瓦建築を訪ねた写真等を展示していますが、煉瓦に関する情報交換の場になればと思っています。

さて、赤煉瓦倶楽部は女性ばかりのメ

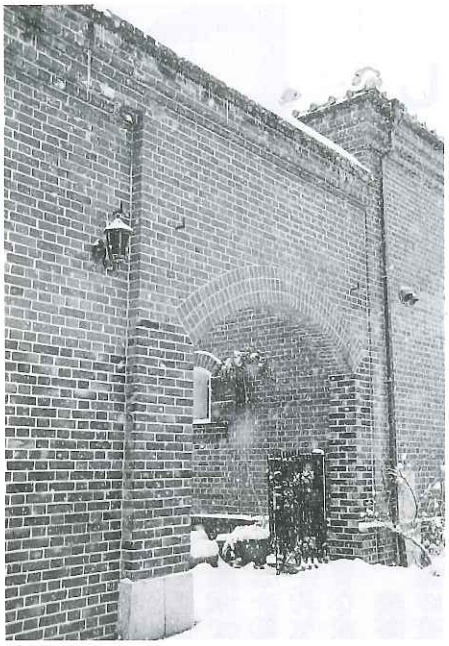
お月見会

女性グループの

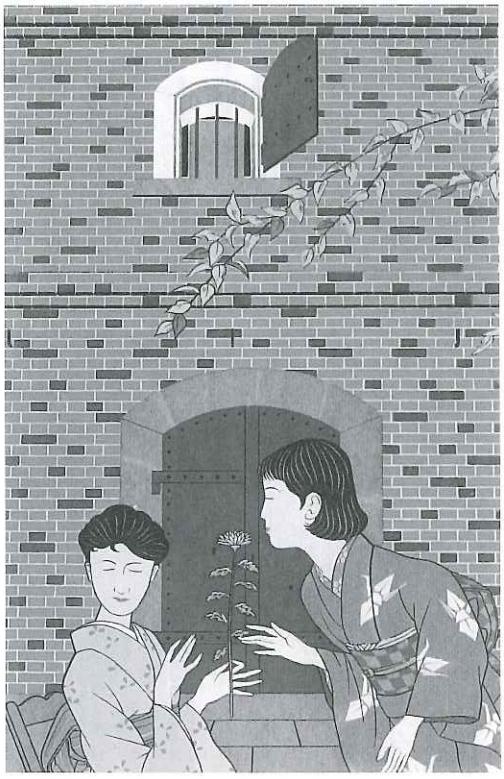
ンバーですが、イベントや事ある度に男性の協力もお願いしています。頼まれるとイヤと言えない、言わさない雰囲気の中、コーヒー一杯で・・・。感謝感謝です。月と行灯のあかりの中で尺八・琴の調べを楽しむお月見会、喫茶室での映画やミニコンサートの夕べ等を催し、地域の方々との交流を深めながら皆で楽しんでいます。また、五十崎町在住の版画ポスターデザイナー山田きよさんに平成九年から毎年赤煉瓦館オリジナル版画ポスターを制作依頼し販売してお客様に喜んでいただいています。山田さんからは『百年の歴史を刻むおおず赤煉瓦館、この建物のように韻致で瀟洒な、そしてなにかしら謙虚な、そんな作品を今後作り続けて行ければ・・・』（記念誌「煉瓦百年物語」より）との嬉しいお言葉もいただいています。また、内部が懐しい木造校舎を思わせる別館は、誰もが利用できるギャラリーで、大洲市民はもとより県内外から年間約四〇企画の利用があり木の持つぬくもりを感じていただいています。様々なジャンルで創作活動をされている方々の作品展は、今や赤煉瓦館の大きな魅力のひとつとなっています。

来る四月～一〇月南予を会場に開かれる「えひめ町並博」では、地域に遺る文化遺産・財産である煉瓦建築の良さを体感して楽しんでもらえるようにと「赤煉瓦探訪とれんがパンの旅」というミニツアーを計画しています。人にやさしい材料と心やさしいパン作りグループによる「こだわりのれんがパン」を試作の最中です。

今、時の流れと共におおず赤煉瓦館も自立の時を迎えようとしています。舞いおちる粉雪をうけて一層美しさを増した赤煉瓦館に、どうすればベストを尽すことができるのか、どうして欲しいのか、問いかけているところです。



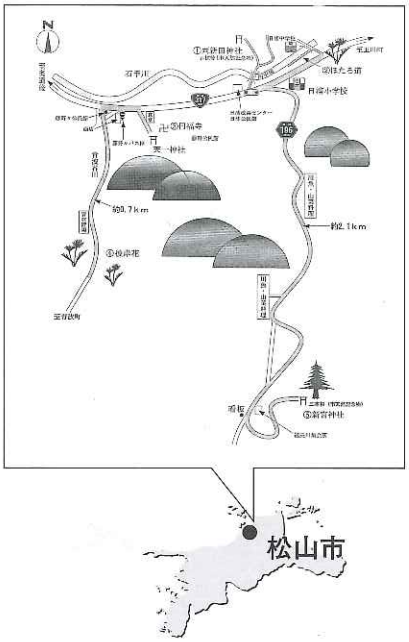
雪の日に



オリジナル版画ポスター「秋色のかほり」
山田きよ氏 作

生きがいとなった地域おこし

松山市
ひめゆりグループ
河野　享子



地域の概要

私達の住む松山市日浦地区は、市の北東部にある山間地の一〇集落からなり、松山市の水瓶、石手川ダムの上流、標高三〇〇～四〇〇mに位置し森林率八三％の地域です。総戸数一七四戸、うち農家数は一〇〇戸で専業農家は一二戸です。

平均気温は市街地より二～三℃低く、主要な産物は、米、夏場の施設ほうれん草、筍等の林産物です。基幹産業である林業の衰退で過疎、高齢、少子化が進行している僻地です。

地域おこしのはじまり

「今治へ国道三一七号が開通する事になったのに、今、魅力ある地域づくりに取り組まなければ、通り抜けるだけの地域になってしまう。」と危惧していた時、当時の松山農業改良普及所の指導を得て環境点検や食生活点検で集落の現状を知る事から始め、当時から、地域おこしが盛んであった一村一品運動の大分県等の視察研修、機会ある度に勉強に参りました。地域の活性化にむけて特産品を作ろうと希望者一一名で「特産品加工グループ」を結成しました。これがひめゆりグループの前身です。

活動（昭和六三年）

一・特産品づくり

地域にある産物の付加価値を高めようと特産品作りに取り組み無農薬の美味しい山菜を安全に食べてもらいたいという気持ちが農産加工を盛んにさせました。普及所のご指導で堀りたて、採りたての新鮮な筍、蕗の水煮山菜ミックス漬、佃煮、梅、栗、キウイのシロップ煮、灰汁で作るこんにゃく等々、意欲的に取り組み、初年度の筍水煮は二一六六本でした。これらの加工品は、松山市農協での予約販売や、近隣の料理店、奥道後市、地元の土曜市で販売しました。お中元、お歳暮用にも注文があり、手作りこんにゃくはホテルで使っていただけるようになり、多忙な中、皆に「何事も一所懸命に取り組めば何かできる」という希望と自身が湧いてきました。

朝市

ビン詰「ひめゆりの里セット
筍、栗、梅、山芋、フキ等

女性グループの

森林組合のご支援で間伐材を利用し、農協青壮年部、グループ員とそのパートナーの協力で手作りの加工場が建設でき、皆様の温かいご支援に感謝しながら益々やる気が出て参りました。この加工場の完成を機にグループ名も地区の花「ひめゆり」に因んで「ひめゆりグループ」と改名しました。

二、体験交流学習

筍ビン詰や手作りこんにゃくの体験学習は大好評で多くの方が参加して下さいました。

三、七草パック作り

夏場のホーレン草の雨よけハウスを冬期活用しようと、平成四年からはじめましたが、現在では二千万を超える、地域のホーレン草に次ぐ作物に成長しております。

交流会で、手作りこんにゃくの体験学習、好評でした

四、彼岸花の里づくり

幸か不幸か日浦地区では基盤整備が入っておらず、九月には石垣が連なる棚田の畔に赤い額縁をつけたように彼岸花が咲きそろいます。黄金色の稲穂と真っ赤な彼岸花のコントラストも美しくカメラマンが大勢訪れる見事な風景で、色々な雑誌でも紹介されました。

地域へ消費者を呼ぶイベントとして「彼岸花祭り」を計画し公民館の共催を得て開催する事ができました。平成一〇年からは地元写真家の協力で「彼岸花写真コンテスト」を開催しています。一席の副賞には日浦産の稲木干し新米コシヒカリ三〇kgを贈っています。初年度の応募は一二四点でしたが、年毎に増え、昨年度は三一〇点になりました。

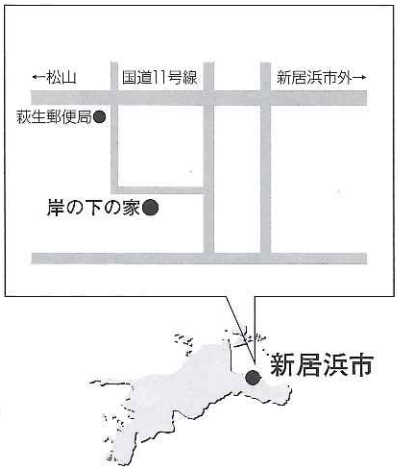
五、地産地消、新鮮な山の幸を街の消費者へ

毎年、大街道で行われる、松山市主催の生活展にも参加するようになり、都市と農村の交流が農村の活性化につながる事を肌で感じるようになりました。生活展での出会いから平成一一年一番町郵便局前で、週一回「ひめゆり日曜市」が開けるようになりました。町内会長さんはじめ町内会の方々の温かいボランティアに支えられテレビ報道され「市」をさせていただいております。

「日浦小・中学校で僻地教育全国大会がある」と聞くと、朝三時集合で草餅をつき先生方をお接待。「公民館の座布団が傷んだ」と聞くと座布団カバーを寄付。「老人会が手作り豆腐が食べたい」と聞くと敬老会で一二〇食を配ったり、独居老人へ愛情弁当を配達したり。地域には、活動を応援してくれる人もでき、「市」のテントや「香典返しを役立てて」と寄贈して下さるようになりました。グループ発足の時立てた目標「筍売って北海道へ行こう」は平成一二年に達成。次なる目標の八ケタ活動を！」は平成一四年に達成。そして平成一四年には「豊かな村づくり全国表彰」で農林水産大臣賞を受賞。いつの間にか高齢者になっていましたが、次の目標は後継者育成、消費者と交流、地域の互助活動となりました。

「継続は力なり」元気で働けるのは最高の幸せ、生きがいです。自然を守り、安全な食物を作り、「趣味も特技も農業。何のとりえも無い、なし。」と笑い合う仲間ですが、生涯教育の気持ちで美しい故郷づくりに仲良く頑張っていきたいと願っております。

地域に生きる



新居浜市
ワーカーズ・コレクティブひと
鴻上　千恵美

「私も、自立したい」

今から八年前のこと、神奈川県のワーカーズ・コレクティブ（以下ワーコレという）に出会う。そこでは、女性のみのグループが生活者の視点から地域に必要な「もの」や「サービス」を事業化していた。デイサービス事業や配食サービス、ヘルパー業務、施設での食事提供サービス、洗濯業務、ワーカー業務等々であった。ワーコレメンバー一人ひとりが出資して経営を担い、そして働き平等に収益を分配する。その為にメンバー全員の出席による経営会議等が再三開催されていた。自主管理の下いきいきと働く女性たちをみて、目から鱗が落ちるようであった。この自主管理する働き方は、経済的自立にとどまらず、住民として課題を解決する力、自治する能力をも身につけていた。

私はそれまで、子ども文庫活動、ゴミや原発問題、福祉施設でのボランティア活動に関わり、考えたりするなかで評論家であったと思った。何故なら私の周りは何も変わらなかったから。そこに反省を込め自分で出来ることを形にすることにより、「私も、自立したい。」と思うようになった。その時、私の目前には、施設という箱に生活している障害者や高齢者がいた。その方々の顔や施設ケアを見るにつけ不自由さや疑問を感じていた。私が障害を持った時、老人になった時、現状のこのケアでは我慢できない、もっと自分らしく生活したいと思った。それが今無いのなら自らの手で作るしかない。そこから、この活動が始まった。

わたしたちにできること

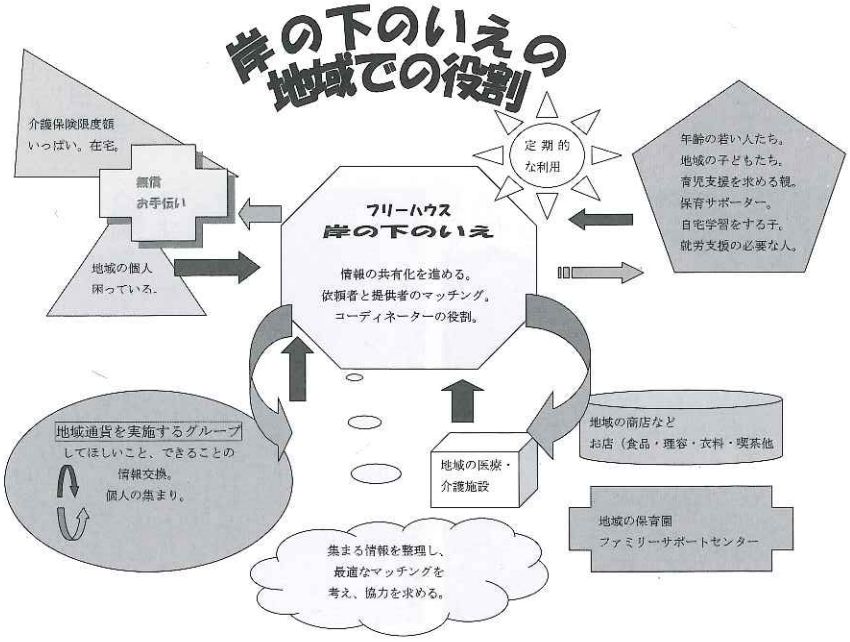
まず、デイケアからスタートした。ワーカーの当たり前のようなトレーニングウェアを普段着に替える、学校のような名札はない、昼食は安心安全の生協商品を中心に国内産にこだわり地産地消を目指した。食器は陶器、みな柄や大きさが違う。洗剤は、合成洗剤でなくせっけんを使用する。ケアにおいては、ワーカーとお年寄りとは上下関係のないもの、老稚園にはしない等心掛けた。こういった活動を三年継続するうちにお年寄りたちが「家で死にたい」と声を上げ始めた。ワーカーや介護者、医師も加わり皆で考えた。家で安心して死ぬにはどうすれば実現できるのか。皆の出した答えは、出来る限り在宅生活を支える小回りの利くサービスを作ることであった。施設ケアが合わないのなら一〇人程度の民家でのデイ

女性グループの

サービスがある。いつでもすぐに泊まれる家があればいい。顔馴染のヘルパーが訪問してくれるとなおいい。すぐ頼める配食サービスも欲しい。ずっと住み続けられる家も欲しい。して欲しいことをすぐにしてくれるケアマネージャーが必要だ。これらを事業化したのが、借家でのデイサービス、グループホームにヘルパーステーション、赤ちゃんからお年寄りまで、障害あるなしに関わらず、来たい人は誰だって居ていいフリーハウス、居宅介護支援事業所、喫茶部門である。これらをサポートしてくれる力強い医師もいた。

地域の介護力

これらが出揃ってもまだ課題があった。独居で痴呆さんは、近所の人が迷惑がり自宅に住み続けにくい。介護費用を割けない人は選択肢が狭まり在宅困難となる。このような平等でない介護の世界がある。これを乗り越えるには地域、隣近所の支え合いしかないと思う。独居で痴呆さんであれば、近所の人がガスの栓を閉めればいい。体調の悪い人がいれば、隣の人が一品のおかずを差し入れすればいい。老々介護であれば何か手伝えることはないかと声掛けすればいい。これらの解決として、いまフリーハウスでは地域通貨を切り口として地域の人たちと一緒に取り組もうとしている。ここには、馴染の顔が異年齢で性別なくすでに存在する。より多くの人と人がレースあみのごとくきめ細やかに地域を紡いでいく結果、「住民の住民による住民の地域福祉」を手に入れることを私たちの夢として切望している。そして、ワーコレ現在一四〇名は、ふつうの場所で、ふつうの暮らしを、「寝たきりにならない」「安心して徘徊できる」つまり、だれもがともに暮らせる地域づくりに参加し、これからも新しい「もの」や「サービス」を生み出し続けます。

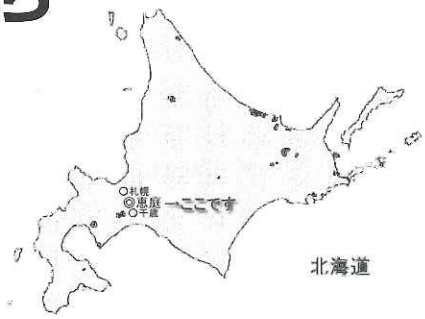


キラリ☆光るまち

～北海道恵庭市～

恵庭市恵み野花の街から

内倉　真裕美



花の街と言われるように成った経過

恵み野は恵庭市のニュータウンとして一九八〇年に開発がスタートした新しい街である。

一九九〇年恵庭市制施行二〇周年を記念して、恵み野で「恵庭花とくらし展」が開催された。その時世界的に花で有名な都市、ニュージーランドのクライストチャーチを撮ったスライド上映会を見て、翌年の一九九一年に市の関係者他が現地に赴き、視察後報告のスライド上映会をきっかけに私は一人会員事務局長として「花づくり愛好会」を結成しました。「クライストチャーチのような花の街を作りたい！」その願いに向けて花の組織を次から次へと作り上げていきますその数七団体。

先ず第一歩として、その年、商店会に主催団体になってもらい第一回フラワーガーデンコンテストを開催。商店会では予算決定した後でもあり予算はゼロ。結局審査員をお願いした方々にスポンサーとなって頂きこの形態は現在でも続いています。又コンテストは最初は公募方式で行っていましたが、すそ野を広げる意味もあって、三回目からは公募はやめ恵み野全域約四三〇〇軒の庭を対象に「恵み野花探検団」が巡り良い庭を写真に収めその中から本審査をしています。一九九五年花づくり愛好会は組織化され、同年、全国的な花のコンクール「花のまちづくりコンクール」で最高の賞、建設大臣賞を獲得し、翌年の一九九八年には全国誌「ミセス」に一六ページの特集を組まれ、「花の街・恵み野」は全国に紹介され、ガーデニングブームも手伝って、全国からも花の庭を散策する人々が訪れるようになりました。

個人的なサークルから恵み野全域を巻き込む組織へ

住宅街の恵み野に多くの人が入り、視察バスが入ることで市民から、「アレは何だ・・・」と言う声もあがるようにな

ガーデニング講座

りました。きちんとした情報を伝える為、恵み野にある東西南北の四町内会、四老人会、商店会、商店会女性サークルのラベンダークラブ等に話を持ちかけ、一九九七年「美しい恵み野花のまちづくり推進協議会（以後ー恵み野花協）」を立ち上げた。

恵み野花協は町内から配布する「花便り」の発行によって花の動きを紹介すると共に、恵庭市に向けて、要望書の提出をした。一つは「花の部署を1本化して欲しい」二つ目は「花の図書館を目指して欲しい」という物。この要望書により一九九九年「花のまちづくりプラン」が作成され、建設部の中に「花と緑の課」が設置、恵庭市民で作る「花のまちづくり推進会議」が組織され、図書館に於いても花の図書の充実を続けている。

個人のガーデニング

恵み野花協はこの他にも、恵み野の駅周辺にある商店に向けて、花の協力依頼文書を作成。商店会女性サークル「ラベンダークラブ」は花の協力依頼文書と共に商店前にある公共花壇一・六キロ区間を測量し、各商店に協力して貰いたい花の数、管理費などを事前に見積もりを出し、アンケート調査により各商店に協力を得た。一九九七年約一一〇店舗に一件ずつお願いして回った時には、「公共用地になぜ自分でお金を出すのか？」など、かなりのお叱りも受けたが、このラベンダークラブのゲリラ的な行動こそが、公共用地の花壇を雑草の通りから花の通りへと変貌させたと言っても言い過ぎではない。

花の通りは、現在では距離を伸ばし駅前商店から両側四キロの区間にまで及ぶ。各商店花壇の花代、管理代の殆どは商店が負担、中学校前の植樹ますには市民より集めた花基金によって花を購入し、生徒約八〇名が出て植栽をする。専門学校駐車場前の二〇〇mボーダーゾーンは花の交換会と銘打って、除草作業、余った宿根草を植えるなど、市民と学生さんが交流を持つ場としても意義を持っている。この、約四キロ区間の公的花壇、植栽ますの花植えは一九九九年より「花の千人植え」と名付け、恵み野住民の協力によって進められている。

その他、ガーデニング講座、花の講演会を開催する事で、市民のガーデニング、花のまちづくりの意識向上に努めています。

行政の土地、空間は、私たち市民の共有の財産で、美しい街を作るのに市民が公共花壇に花を植えることの、義務はないけれど権利はあるはず。自分たちの街は自分たちで作って行きたい。

商店前

農村女性とツーリズムビジネス

熊本県人吉市
家庭の郷土料理　ひまわり亭
代表　本田　節

はじめに

いまや日本各地で農村女性たちが起業家として様々な事業を興し、地域活性化（まちづくり）の一役を担っています。農家民泊、朝市や直売所、農産加工、農家レストランや観光など、「食」に関わるツーリズムビジネスはまさに主役が女性なのです。そのような元気で素敵な女性達が平成一六年二月二八、二九日に熊本県の水俣市に約五〇〇人が参集し、第一回全国グリーンツーリズムネットワーク熊本大会が開催され、活躍しているパネリストの実践発表、ツーリズムビジネスの課題と今後の展開などについて、活発な意見交換があり、会場が一体となった熱気あふれる分科会でした。そこで、今回は農山村の女性の元気、女性の笑顔、女性のまちづくりということで、事例の紹介から始めたいと思います。

素敵な女性起業家紹介
—水俣大会から

・新開玉子　（福岡県福岡市　都市農業直売所「ぶどう畑」経営）

生業は農業。都会が生きるためには周辺の農村が必要ということを発信したい。「モノを売るだけなら直売所なんてしません。農家の心を伝えたい。そのための直売所です。」生産者と消費者の「心」が感謝でつながる車の両輪になることを目標に活動中。まさに心を耕す直売所である。彼女自身の農業人生の集大成としたいと言っている。

・中山ミヤ子　（大分県安心院町　農泊「舟板むかし話の家」経営）

行政主導ではなく地域の住民から盛り上がった農家民泊。八年前に「一回だけ」という軽い気持ちでスタートし、交流が広がっていった。もてなしのモットーは「元は掛けない、気持ちを掛ける」である。「いいお客さんばかり来てくれるから楽しみなんですよー。普通の旅館では考えられませんよね。だからコレやめられんわー。」中山さん御夫妻の人柄にファンも多く、全国から来るお客さんは絶え間ない。

・原田則子（鹿児島県牧園町　農産加工レストラン waiwai アトリエ）

村おこし塾参加を契機に仲良しグループ時代を経て、平成三年から本格的な経営、主婦のアイデアが街とムラとをつないだ〝こだわりショップ〟。「田舎はまだまだ男社会。まちづくりなどで女性がモノを言えるようになるには数字で実績を示すしかない。そんな思いで経営してき

高齢者雇用、地域女性達の交流サロン
“ひまわり亭”

素敵なパネラーの皆さんの発表風景

て、今では年商七〇〇〇万円になりました。」と彼女は言う。そして、女性が地域づくりに参画するためのまさに「女の学校」となっている。

・**河津慶子**（熊本県南小国町　農家の宿「さこんうえの蛙」経営）

九州ツーリズム大学一期生として地元食材の活用を学び、平凡な主婦が農家民泊を始めた。良きパートナーの夫、正純さんはこう言う。「農家民泊は農業の延長。夢を描ける集落にしていくための手法である。小さな農家でも楽しく生きていける方法。」だと。まさに、宿は人の流れを生み、都市と農村、人と人の交流は小さな集落の活気につながった。

・**合瀬マツヨ**（佐賀県三瀬町　直売所「マッちゃん」経営）

マッちゃんは言う「ずっと百姓をやってきて、やっと子育ても一段落した時に、これからは自分の考えで動いてみたいと思ったのね。」立ち上げ当初の頃の直売所を語るときのマッちゃん「家族みんなが反対する中で、何かをやろうとするなら、なんちゅったーじゃやるぞ、やるしかなか、という強い気持ちが必要でした。」と。そして今、直売所を通して農村の魅力を再発見できた。ツーリズムの出発点であった。

・**本田節**（熊本県人吉市　家庭の郷土料理「ひまわり亭」経営）

生涯現役、地元主婦達の経験、知恵、技、感性を生かした農家レストラン。「次世代への食文化の伝承とコミュニティビジネス」をテーマに六年前に開業。地域の資源は「人」。「待ってました、定年。六〇歳新入社員。」という高齢者雇用である。地域の食の名人さん達を講師に郷土料理伝承塾を主宰。

コーディネーター本田節がまちづくりを熱弁

まとめ　ーツーリズムビジネスの課題と今後の展開

・課題として農山村漁村では社会的、経済的に女性が起業することの困難性や、家族や周囲の理解を得る努力が必要である。

・グリーンツーリズム（まちづくり）の推進のためには、規制緩和が必要である。

・高齢者や女性の知恵・技・感性を最大限活用する。

・行政、住民、学識者、地域企業、NPOなどの連携ネットワークづくり

以上のようなまとめで会を閉めました。北海道から沖縄までの参加者のやる気、元気、勇気に圧倒され、これからのまちづくりは〝女性の元気、笑顔、感性〟が地域活性化の〝素〟であることを確信した全国大会でした。

〝全国の農山村女性の皆さん、しなやかに、ゆるやかに、したたかに暮らし方を楽しみましょう。〟

地域づくり・まちづくりに想う

五〇年昔のむらづくり

今からおよそ五〇年の昔、私は県職員となってはじめて南予へ出掛けた。まさに「耕して天に至る」あの段々畑のすぐ麓に建つ半農半漁の家。ちょうど昼どきで、案内役の生活改善担当の農業普及員が、かまどで湯気を出している鍋の蓋をとれというので、中を覗くと黒いドロドロのなかに白い粒が交じってグラグラと煮たっていた。黒いものは甘藷の切り干し、白いものは裸麦。この地域では田が無くて米は取れず、段々畑に夏は甘藷、冬は麦を植えて生活をしているので、常食はこのカンコロメシと海でとれるホータレイワシだという説明であった。

昭和三一年、農林省は全国の農山漁村を対象に「新しい村づくり」運動と称する補助事業を始めた。これは一定の地域を指定し、その土地に適する作物や家畜を育て、その規模を拡大することによって地域を豊かにしようとする政策であった。いわゆる基幹作目の選択的拡大農政の展開であった。愛媛では太陽と、海からの潮風そして土質が最適とされる柑橘を中心に、南予段畑・東中予の海岸部や島嶼部などで温州みかん・甘なつ柑・伊予柑・レモンなどの有力な主産地が形成され、昭和三五年には静岡県を追い越して生産量日本一となり、その地位は四〇年を経た今もかわっていない。また、米麦・養蚕・養鶏・養豚・牛・茶などを基幹作目し特産品づくり〜として事業を行う地域も各地に出現した。

昭和三六年からは農業構造改善事業が推進された。農林省が目標としたのは、農業者が農業のみで都市勤労者と同等以上の所得（従って消費水準も）を上げることにあった。しかし、柑橘選果場にしても米のカントリーエレベーターにしても数農協が一緒に利用できるような広域かつ大規模の施設を建設し利用するもので、大半の補助事業は、農家がこれを拠点に力を合わせてむらづくりを進めるという性格のものでは必ずしもなかった。

昭和四五年頃には米と柑橘の過剰生産による国内生産の制限、農産物貿易自由化要請の強まりとともに農地制度の制約もあり、農山村での農業と農外産業との連携による自由な村づくりには、限界のあることが次第に明らかとなってきた。

世界第二の経済大国に

一方、我が国の経済は昭和三一年からの神武・岩戸・いざなぎと続く好景気の持続によって、世界からエコノミックアニマルと冷笑されるほどの急激な拡大をなしとげた。

この経済成長がもたらしたものは、もとより国民所得の飛躍的な増大であり、国民一人あたりのＧＤＰ（国内総生産）が当時の西ドイツを追い越し、米国に次ぐ世界第二位となったのは昭和四二年のことである。文字どおり世界の経済大国の仲間入りを果たした。

世界に例のない国民経済の発展が、我が国の農家経済に及ぼした影響は大きい。農家総所得のうち農外所得が農業所得を大きく引き離す格差を示し、交通通信手段の発展とともに都市と農山村との消費水準の差は殆ど解消した。

しかし、一方では農山村地域に高齢者の増大と、若い後継者の枯渇、当然に過疎化、ひいては集落の崩壊というような

深刻な事態をもたらした。またこの頃、国民皆保険・皆年金の施策も伸び、社会保障の量的拡大も進んだ。

バブル経済の発生とデフレ不況

昭和六一年頃の円高が契機とされる我が国の経済は、土地や株価の暴騰など実態のないバブルに踊らされた時期が数年続いた後に、消費不況、デフレ、金融引き締めなどが続き本日（一六・二・一九）の新聞では十三年振りにGDPが年率七％増になると報道されているように、漸く曙光が見え始めたという状況となった。しかしこの間に、中央政府・地方自治体を含めて膨らんだ借金は、我が国の一年間のGDPに匹敵する以上の巨額となり、国民生活を圧迫する要因となっている。

まちを歩いてみる。かつての老舗の料亭が何軒も跡形もなく消えて、広い駐車場と化している。地方の商店街ではシャッターをおろした店舗がやたら目につく。

農山村では集落がなくなりそうだ、あるいは到頭なくなってしまったという話をよく耳にする。段々畑では石垣が崩れ、蔦がからまった荒れ山をみる。近郊農村でさえ雑草が生えた耕作放棄地と見られる、もと水田らしい場所にしばしば出くわす。

カネが全ての社会風潮とコミュニティ

今の世相をみて、日本は二度目の終戦に会ったようだ、と言った人がいる。昭和二〇年の時は戦争で全てが焼失し、食べるものまで不足した。あの荒廃した頃とは物質的には全く状況は異なるが、人びとの精神面または社会風潮の面を見ると、あるいは終戦直後と同じかもしれない、という気がする。

それは、カネが全てだと考える社会の風潮である。社会全体に苛め体質が蔓延し、高齢者や障害者、子供達などいわゆる弱者に対する思いやりや気配りなどの気持ちが欠如していることである。かつて我が国には、謙虚とか慈愛とか勇気とか、貧しさ故に大切にされて来た価値意識が、人びとの心の底に潜在していた。日本的だと言われるかも知れないが、この意識を顕在化させることが、今一番大切なことだと私には思われてならない。

まちづくり、むらづくりの基本は、このこと、つまりコミュニティー（地域社会）の人と人との関係を確かなものにすることから始まるとさえ思う。

愛媛県では知事の発案によって「愛と心のネットワーク」づくりを進めている。これをまちづくりのテーマの一つとして取り組む地域が沢山できることを期待する所以である。

市町村合併の中身は地域づくり

今、県内では市町村合併が進んでいる。六九の市町村が合併で二〇くらいに再編されるそうだ。限度のある国の財源を、多くの市町村で分け合うよりも、少ない数で分ける方が一市町村当たりの効率が良いという考え方が基にあるようだ。確かにそのとおりだが、市町村の範囲を大きくすることは、いわば入れ物の議論であり、それはそれで大切だが、中身つまり地域づくりの内容こそが重要であると私は思っている。中身を作るのは地域に住む住民の一人ひとりの意欲と努力であることは論をまたない。

ほぼ半世紀、五〇年を経て行う合併である。地域に住む人びとが、真に住んでいてよかった、これからも住み続けたいと思えるような地域づくり・まちづくりに努力をしたいと心から願っている。

（えひめ地域政策研究センター
調査役　**藤井和郎**）

ワークショップ

松山市
ＮＰＯ法人
えひめＮＰＯセンター
スタッフ
石丸　英章

Self Portrait

平成一五年度の地域づくりコーディネーター育成研修（地域政策研究センター主催）では、ワークショップの手法を用いながら様々なことを学ぶことができた。

私が初めてワークショップに出会ったのは美術教育の分野だ。八年前、大学院で美術教育を学んでおり、その研究テーマに取り上げた。それまで美術作品の創作は「自分を見つめ、一人で」と思い込んでいた私にとって、「多様な価値観を認め合い、集団で創る」という理念は新鮮だった。場合によっては、見知らぬもの同士が世代を超えて作品を創りあげていく。そこには人と人とのつながりを生み出す場があり、強く惹かれていった。

二年前、私はひょんなことからＮＰＯの推進・支援に携わることとなり、よりワークショップに惹かれていく。ＮＰＯの理念の一つは「多様な価値観を認め合う」ことだ。それはまさしくワークショップの理念と同じだった。ＮＰＯの現場や研修では、ワークショップの手法がよく用いられており、その後、多くのワークショップに触れ合うこととなる。

地域づくりコーディネーター育成研修もその一つだ。他の研修生と「地域づくり研究フォーラム」を開催させていただいたが、その企画や準備の中で様々な議論をしながら、なんとか開催にこぎつけた。振り返って思えば、その過程が全てワークショップではなかったろうか。

私はワークショップを、「参加型体験集団学習」と訳している。研修の参加者は自発的な参加だ。そしてフォーラム開催という体験を通して、集団で創りあげながら学んだ。まさしく大掛かりなワークショップだと言える。

ワークショップでは作品やアイディアや意見など、何かを創り出すこと（あるいは意見の集約など）を目標とすることが多く、必然的にコミュニケーションが発生する。ある人は「ワークショップとはまさしくコミュニケーションだ」と言うくらいだ。

他人との関係が希薄な現代日本において、自分を含め、多くの人はコミュニケーションが上手いとは決して言えない。ワークショップはコミュニケーション促進のツールでありコミュニケーションの学びの場だ。人と人とのつながりを取り戻す手法や訓練として今後、より必要とされるであろう。

そして社会とはワークショップそのものだと思うときがある。ワークショップとは「参加型」「体験」「集団」「学習」の中で「（何かを）創り出す」ことだ。これを「積極的に」「行動し」「人と関わり」「考えながら」「社会を創り出す」ことと言い換えることができるのではないだろうか。

新しい社会を創り出そうとする者にとって、社会とはワークショップそのものだと思う。ワークショップの手法と理念を社会に拡げ、浸透させることは、私にとって新しい社会を創り出すことの一つだ。

スタート

砥部町
陶房遊
松田　啓司

焼き物の里で生まれ育った私が陶芸に興味を持ち始めたのは、中学3年生の時でした。

高校は、陶芸の授業のあるデザイン科に進み手作りの楽しさを覚えました。

卒業後、佐賀県の窯業大学校にロクロ科で一年間という短期間ではありましたが本格的に陶芸の勉強をスタートさせました。私は、窯元の家で生まれ育った人間ではありませんので、一年のコースを終えてどのような道に進むか悩みました。

このまま佐賀に残り就職するか、それとも将来、自分の窯をもてるようどこかで修行させていただこうか。その時「地元に帰り自分の窯を持てるよう頑張ってみたらどうか」とのアドバイスをいただき私自身も焼き物に対して興味も増して来た頃でもあり、地元に帰り、中田正隆先生にお世話になることになりました。私はロクロでの成形しかしたことがなかったので、絵付けや釉薬など形だけではなく多種多様の表現方法があることを初めて知りました。朝から夜まで陶芸の仕事していて飽きる事なく毎日が楽しく充実した日々を過ごしました。中田先生には、ロクロ、絵付けの技術は、もちろん、焼き物に対する考え方など話していただき、とても楽しくますます陶芸への興味を深めることになりました。

沢山の人々の助言と応援をいただき、昨年二月、自分の工房を築く事が出来ました。夢に描いていた工房の完成に胸躍る気持ちで一杯でしたが、その気持ちにいつまでもひたっている訳にはいかず、早速、現実に引き戻されました。お客様に使って頂ける商品を考えなければならないのです。八年間、修行してきた成果をどのように商品に反映させるか試行錯誤の毎日です。満足出来る作品が出来たと思っても世間に受け入れられるかどうかは、又、別問題ですがお客様が作品を手に取って気に入って頂けた時の喜びは格別です。まだまだ修行の毎日ですが一人でも多くの人々の目にふれる事を願って毎日、奮闘中です。

一〇年先、二〇年先、どのような作品を生み出せているか私自身も楽しみにしています。

手作りの温かみ夢のある砥部焼を作れるよう、これからも多くの方々の意見に耳を傾けられる人間でありたいと思っています。

陶房遊

ひめ
媛のかわら版

えひめのがんばるママの応援団!!
（その２）

松山市　NPO法人 子育てネットワークえひめ
代表理事　山本　由美子

子育てネットワークえひめの活動

子育ては母親一人が背負うものではない。たくさんの人に支えてもらい、親子で成長していくものだ！地域の皆が子育てについて考え、支え合う子育てができたらどんなにすばらしいだろう！そんな思いで、平成一二年に子育てネットワークえひめ（通称こねっと）は誕生した。翌年ＮＰＯ法人格を取得。現在の孤立した不安な子育てを、安心な子育てに変えていこうと活動をスタートさせた。

私たち、子育てネットワークえひめは、えひめの「がんばるママの応援団!!」として子育てにやさしいまちづくり、人づくりを目指して活動している。

理念

・子育て経験を生かして、新しいコミュニティづくりを構築。
・少子化社会の中で、子育てにやさしい環境改善を提案。
・子育ての楽しさや大変さをママの視点から情報発信。
・子育てママが社会に参画して、スキルアップの場を創る。
・子育てママのパワーを集めて一〇〇％の仕事を実現する。

「がんばるママの応援団！」として子育てネットワークえひめは、５つの事業を展開しています。

1 子育て支援活動事業
- 松山市空洞化対策補助事業 柳井町商店街「おやこのフリースペース」

2 ネットワーク事業
- 県内の育児サークルや子育て支援施設の情報収集
- 県内育児サークルネットワーキング

3 啓発・広報事業
- 会報誌「こねっと通信」年４回10,000部無料発行
- 審議会、委員会への参画
- マスメディアとの協働

4 調査・研究事業
- 経済産業省「市民ベンチャー事業」採択
- CGIシステムを使った調査やアンケート調査

5 再就職のための事業
- 在宅ワーカー養成講座
- ライフスタイルに応じた就業ケア

商店街における「おやこのフリースペースこねっとひろば」

最近の少子化で小さな子どもとふれあう機会がないままに親となる現代の事情がある。だから、余計に子育ての悩みは多いのであろう。核家族化で、日常的な子育ての悩み、疑問、不安を聞いてくれる人もいない。昔はこんなときに、大家族の中の子育て経験者に知恵を借りたのだが・・・・。

今では〝育児相談〟という窓口がたくさん準備されている。しかし、毎月第〇曜日など決まっているのが現状だ。しかし、いま、困っているのだから、それま

で待てない。そんなときに育児経験者がそばにいて、話を聞いてくれるだけで心が落ち着き安心できる。専門家に聞くまでもなく、母親が気分転換をしながら、少しだけ先輩ママに話すことで解決できることが多い。

私たちは、子育てに疲れた親たちがホッとできる空間、仲間作りの場として情報交換や交流を目的に、平成十四年に松山柳井町商店街内におやこのスペース「こねっとひろば」を開設した。月曜日から金曜日一〇時～一五時、いつでも気軽に立ち寄り、育児の知恵を学ぶ場として、子育て真っ最中の親たちが集っている。ママ同士で解決できないことは、小児科医師による育児相談（月一回）を実施して、学ぶ場も提供している。

柳井町商店街

室内は、木のおもちゃと絵本一五〇冊を取り揃えており、ボランティアによるおはなし会は、好評で、商店街でのおはなし会は通りすがりの方も楽しんでいただいている。

柳井町は店主の高齢化が進む商店街で、ここでは自然と三世代の交流もできるのだ。子どもたちが商店街を歩くと、声をかけてくれる。よく遊んでくれるおばちゃんを子どもたちも覚えていて、商店の前で立ち止まり、店の中をのぞきこんでは、出てきてくれるのを待っている、こんな風景をよく見かける。

「こねっとひろば」は、パワフルなスタッフ、元気なママたち、そして泣いたり、笑ったりの子どもたちの笑顔であふれている。

こねっと通信一万部無料配布中

私たちの会報誌「こねっと通信」は、年四回（三月、六月、九月、一二月）一〇、〇〇〇部発行している。

発行するための資金は、企業からの協賛広告ということで、広告費をいただいて印刷代に充てている。発行当初はなかなか広告が集まらず、赤字発行であったが、最近では、毎号協賛広告がいっぱいになる状況だ。「こねっと通信」は、子育て中の親が手に取る、また公共の施設へ配置されることで企業にとってのメリットも大きいのであろう。

「こねっと通信」を作るスタッフは母親である。読んでくれる人も同じ母親であるから、興味、関心が読者に近いことで、たくさんの支持をもらっている。だから、企業も応援してくれるのだ。

県内でパワフルに活動するママたちや、ママが日頃感じていることをこれからも企業や行政に、また同じ仲間に私たちは、「こねっと通信」を通して発信していきたいと思う。

親子でコミュニケーションの場

“MY TOWN„うぉっちんぐ

歩キ目デス&足ラテス

第27弾

土木遺産に光を！…大洲市と西条市の場合

岡崎　直司

近代化遺産についての悲喜こもごもの話をするとしよう。

まず、最近の話題から。

①

油屋旅館全景

大洲市の名旅館として知られた油屋旅館が壊されてしまった。（写真①～③）丁度、年内の完成を控えた大洲城天守閣の木造復元に耳目が集まり、虚を突かれた感じでそのニュースは伝わった。

かつて、司馬遼太郎氏も宿泊し、NHK朝の連ドラ「おはなはん」が一世を風靡した頃、多くの俳優達も泊まった名物旅館。老朽化という理由にはなっているが、活用策を持ち得なかった地域の現況が惜しまれる。近代和風の間取りや装飾が随所に見られ、ともかく何十畳敷きもある大広間や客間の数々、内部で迷いそうなくらい大きな木造建築であった。

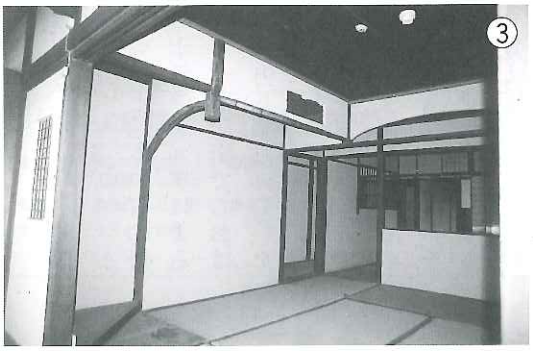
かつての大洲が養蚕業で栄え、至る所で製糸業の機械音が街中にあふれていた、そんな時代に油屋は千客万来だったのだろう。

更地になった跡に佇むと、妻壁に「西」と描かれたこれまた大きな土蔵のみが残り、いつかの賑わいを伝えている。こちらの蔵はJR四国の活用案により残されるらしい。（写真④）ふと目をやると、一本ものの大きな石が横たわっている。（写真⑤）解体した瓦礫で埋まっているが、どうやら石組みの状況から察すると、肱川への出入り口らしい。それこそこの町の古の姿は、肱川水運無くしては考えられない。こうして、商家や旅館が川沿いに立ち並び、人はみな表通りばかりでなく、こうした裏口から肱川へと出入りをしていた。そんな遺構でさえ、もう今の大洲にはめったに見られない。これは貴重な土木遺産の一つである。洪

②

玄関

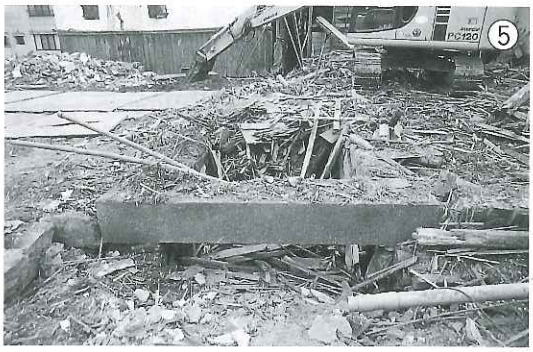
③



内　部

④

土　蔵



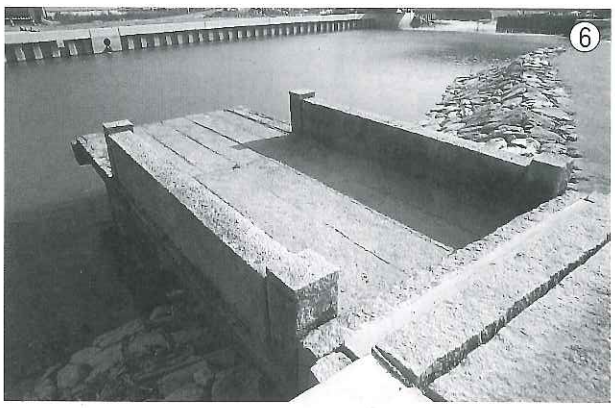
解体後に残る雁木遺構

水防止のために戦後コンクリート製の高い堤防で遮られ、母なる川肱川と町の関係は一変したが、残せば水郷大洲の大洲らしい物語が蘇生する。

近年は、やっとと言うべきか、単に地味な存在でしかなかった土木系の文化遺産に光が当り始め、各地で無言のそれらがナニゴトかを語り始めている。

西条市での一例を紹介しよう。近世の大干拓地である禎瑞地区でのこと。

市が行った(財)日本ナショナルトラストによる地域資源調査の一環で、偶然クローズアップされたものがある。「掛け樋（かけひ）」と呼ばれる、国内でも非常に珍しい水路橋の一部が残っていたのだ。（写真⑥⑦）江戸期、西条藩による海岸埋め立てにより、海面下にもなる禎瑞地区の水利は、非常に困難な状況克服を余儀なくされた。つまり、真水を常に安定供給出来なければ、地勢学的に海水の浸入を許すこととなり、上水の供給と悪水の排水は大命題であった。幸いにも石鎚山水系の恵みを受け、自噴水の土地柄ではあったが、供給すべき上水と悪水を分離するための水路の立体交差を考案し実行に移された。それが「掛け樋」である。水路を渡る為の水路、ウォーターブリッジ。



整備後の掛け樋

既に一部は別な場所に移設保存されてはいたが、市の資源調査の際、幸いかなまだ現地にはその立体交差の状況が歴然と残っていた。しかし、近く河川改修で撤去予定であるという。直ぐに、地元の郷土史家三木秋男先生におすがりし、市と県の担当者にも検討していただくこととなり、待つこと一月余り。各部署の方々のご尽力により、現地にそのまま整備されて残されることとなった。やれやれ一安心。

もし、全容が残っていれば、その希少価値と地域における象徴性は、重要文化財でもおかしくないシロモノである。今回のようなケースは稀であるが、地域のかけがえの無い遺構をつぶす所であった。地域に歴史に詳しい語り部が居て、担当者が理解があって、それぞれの連携プレーがうまく運んだ時に、やっと遺されるのである。

大洲油屋旅館の雁木石垣も、是非せめてこれくらいは後世に伝えて欲しいものである。

掛樋の由来

平成一五年度地域づくりコーディネーター育成研修会報告

はじめに

昨年の六月から今年の二月にかけて、えひめ地域政策研究センターでは、新たな事業として、愛媛県の委託で、「地域づくりコーディネーター育成研修会」を実施しました。

地域において、行政と住民の協働が不可欠とされる中、その橋渡し役（コーディネーター）となれる人材を育成していくことを目的に、ワークショップを中心とした内容で取り組んできました。

前田眞氏（邑都計画研究所代表取締役）を年間演習講師に迎え、民間の方を中心とした一八名の研修生（東は伊予三島市、南は城辺町）でスタートしました。

ここでは、その活動を報告します。

年間スケジュール

第一回　（6月27日・松山市）
・講演／オリエンテーション

第二回　（7月24日・松山市）
・ワークショップの手法について／まちウォッチング etc

第三回　（8月28日・松山市）
・現地研修の企画

第四回　現地研修（10月4・5日・内海村）
・フィールドワーク（海班、陸班）／漁師市、ゆらり視察／グループ作業（マップづくり・評価）

第五回　（10月23日・松山市）
・現地研修の報告・評価／地域づくり研究フォーラム企画

第六回　（11月13日・松山市）
・地域づくり研究フォーラム企画

地域づくり研究フォーラム（1月18日・松山市）
・基調講演／講師へのインタビュー／分科会／分科会報告・質疑応答

第七回　（2月26日・松山市）
・地域づくり研究フォーラムの評価／研修会全体をとおしてのまとめ／講演／意見交換／修了式

第一回

ワークショップの実践家として第一線で活躍している、山口県徳山工業高等専門学校助教授熊野稔先生を招き講義を受ける。ワークショップを取り入れた地域づくり活動や、全国での先進地事例紹介など、地域でコーディネートをしていく中でのワークショップの可能性、必要性について学習しました。その後、演習講師、前田さんの指導のもと、他己紹介やKJ法といったワークショップの手法を実際に体験しました。はじめは、緊張していた研修生たちも、ワークショップを体験していく中で、自然と笑顔がでて、積極的にコミュニケーションを図っていた。

第二回

ワークショップとは何か？またどういった手法があるのか？資料を参考に学習。その中の「まちウォッチング」という一つの手法を体験した。子供や、ハンディキャップのある方など、いろいろな立場になったつもりで、松山駅方面・城山公園方面をウォッチングした。良いところ、改善したいところなどをデジカメで撮影し、それをパソコンにて編集。なぜそこを撮ったのか理由を考えてもらい、皆の前で発表をした。

第三回

四回目に行う現地研修の企画を行った。「7W2H」という手法を参考に、3つのグループごとで企画を考え、完成した企画を全員の前でプレゼンテーションした。独創性／効果性／計画性／実行力／実施に向けての熱意・意欲／といった五つの項目により、研修生一人一人がその企画を評価した。集計結果と話し合いの中で、会全体での企画を一つに決めた。結果、内海村での企画が選定された。その後、決まった企画を研修生全員で、更に充実させていった。

グループプレゼンテーション

第四回（内海村現地研修）

内海村では、研修生が考えた企画、ス

ケジュールのもと、海班と陸班に別れて、フィールドワークを体験した。地元の人たちの温かい協力のもと、海では真珠養殖いかだ周辺を見学、シーカヤックをなどを体験し、陸では、須ノ川公園、グリーンパーク、を散策、視察した。その後、今年一〇月、新しくオープンしたゆらりの施設を借りて、体験したことをマップに落とし込む作業をした。また、ゆらりの中も視察し、気付いたことを図面に落とし込む作業を行った。最後に、出来たマップを地元の方に渡し、現地研修を終えた。

マップづくり（ゆらり）

第五・六回

現地研修での報告、評価の後、研修生が自主企画運営する地域づくり研究フォーラムの企画を行った。フォーラムの企画では、リーダー、書記の選出からはじまり、テーマの設定、日程の調整、役割分担など、研修生自らが主体となって行った。

研究フォーラムの企画

地域づくり研究フォーラム

県内各地より、およそ一二〇名の方が参加の中、地域づくり研究フォーラムを開催。「二一世紀の地域づくり～温故知新～」をテーマに、すでに地域にある素材（自然・建築物・歴史・文化・食・人材）をどう活かしていくか、研修生が司会、進行、運営をしながら参加者と一緒になって考えた。

「21世紀の地域づくり～温故知新～」講師と研修生のインタビュー風景

七回目（最終回）

はじめに、地域づくり研究フォーラムの評価・研修会全体をとおしてのまとめを行った。その後、東予市役所職員であり、えひめ地域づくり研究会議代表運営委員の近藤誠さんより、まちづくりをしていくなかでのコーディネーターの役割についての講義を受けた。その後、近藤さんと共に、コーディネーターの資質などを中心に自由討議を行い、最後に修了式を行った。

全体をとおして

今回の研修は、これから地域で活動していく上でより実践的にしていこうと、研修生自らが、勉強したいテーマを決め、フィールドワーク、地域づくり研究フォーラムなど、自らが企画、実施、評価した。

地域づくり研究フォーラムの準備に当たっては、より良いフォーラムにしようと、研修会以外でも、自主的に集まり、議論を重ねてきた。意見の違いもあり衝突することも多々ある中、何度も話し合っていく中で、お互いをより理解しあうことも出来た。

若干、ワークショップという手法が先行しすぎ、コーディネーターとしての資質について論議する時間が少なかったという反省もした。

研修生からは、「一年をとおして、実践をしていく中で、合意形成していくことの難しさ、コーディネートしていくことの大切さを知ることができた。」「これから地域で活動していく中で良い経験になった」という意見を聞くことができた。

この事業は一六年度も引き続き行う予定です。事務局としても、反省を活かしながら、より身になる研修を、今後とも実施していきたいと考えております。

一年間を通じて、お世話になった方々に改めて御礼申し上げるとともに、今後の研修生の活躍をお祈りいたします。

研究員卒業レポート

思いを持った地域住民に

前研究員　橋岡　勝一（ＪＡ全農えひめ）

大阪で「愛媛のまじめなＰＯＭジュース」の販売の仕事をしていた私が、このセンターに来たのは平成一二年の春のことでした。センターのような地域づくりに関する仕事ができるところがあるなんて、全然知りませんでした。元々地域情報誌等に載っている県内の市町村の自然風景や古い建物を見に行くのが好きだったので、まず最初にただ単に「面白そう」な仕事だなと思っていたことを思い出します。

それから四年間、農村を中心に県内外のいろいろな地域に行かせていただきました。そこでいろいろな人たちと出会い、お話を聴く中で、輝いている地域、きれいな自然風景や環境、歴史ある古い建物が存在するにはその〝裏側〟があることを知ることができました。そこには、必ず関わってきた人たちの思い、努力、それぞれの地域の「プロジェクトX」があります。〝地域に人がいる〟というのは当たり前のことですが、センターに来るまではあまり意識していなかったことでした。

「地域づくりは人づくり」とよく言われます。地域づくりについて考える人、実践する人、協力する人など、まず人がいなければ地域づくりは始まりません。

昨年県内で地域づくり活動を実践されている「人」にスポットを当てた本「えひめの地域づくり人　一〇〇人」を作らせていただきました。みなさんがそれぞれに考え、実践されている地域づくりについて取材しました。考え方は百人百様で、景観保全や環境、福祉など活動されている分野も違いますが、みなさんに共通して言えることは自分の住んでいる地域に対して強い愛着を持っておられることだと思います。地域の将来に対する夢を持ち、楽しみながら、よりよい地域にしていこうと考え活動をされています。

この取材でお聞きした話は、地域づくりだけに留まることではなく、その人の人生、生き様だったのではないかと思います。私自身のこれまでの人生、これからの人生を考えていく上でも大変いい勉強になり、みなさんの足元にも及びませんが、地域を本気になって考え、自分のできることから始めようと思いました。

グリーン・ツーリズムの調査で熊本県小国町の九州ツーリズム大学や大分県安心院町の農家民泊などの先進地に行かせていただきました。そこで感じたのは、お会いしたみなさんの人柄や会話、活動などが魅力的で、その魅力にひかれて人が集まっていることです。魅力ある人に

は、高い志があり、信念があります。当然集まってくる人たちにもその人と同じ思いがあるのではないでしょうか。

市町村合併が進んでいき行政単位が広域になっていく中で、小さな地域の地域づくりが重要になってくると思います。〝自分たちの地域のことは自分たちでやる〟という自立した地域をつくることが必要になってきています。そのためには、地域を意識した自立した地域住民をどれだけ増やしていくかにかかってきます。そして、地域のコミュニティが再生されて地域内の個人、グループとの連携が生まれ、そこから地域外とのネットワークも生まれてくると思います。

私は生まれも育ちも松山で、小・中学校・高校・大学すべて文京町の学校に通いました。センターでは主に外の地域を見てきましたが、訪問した視察先で「君の住んでいるまちのことを説明してみて」と言われ、一瞬どうしようと思いました。とっさに思い浮かんだのが道後温泉と松山城のことで、観光的な感覚でお話ししました。その後、その方から「自分の住んでいるまちを説明するには、まちの成り立ちから話せないとね」と言われました。その時、自分が住んでいる松山のことをうまく説明できなかったこと、地形や歴史、文化など知らないことが多いことを恥ずかしく感じました。それ以来、もっと生まれ育った松山のことを勉強していこうと思い続けてています。

そして、私がセンターで得たものを活かすために、まずは地域への思いを持った住民になること、そして、ここで出会った人たちとのネットワークづくりを続け広げていこうとも思っています。

四年間みなさん本当にお世話になりました。センターは離れますが、これからもよろしくお願いします。

あなたのまちづくり活動をアシストします

「まちづくり活動アシスト事業」申し込み受付中

まちづくり活動アシスト事業の概要

1．目　　的

地域づくりのためのワークショップやイベントの開催、広報資料の作成などの活動を行っているまちづくりグループに対して、活動費の一部を助成することにより、地域におけるまちづくり活動の活性化を支援する。

2．対象事業

支援の対象は、まちづくりに関する次の活動とする。

・学習会・シンポジウム・ワークショップ等の実施
・活動の輪を広げるためのイベントの開催
・チラシ・リーフレット等の印刷、広報紙の発行、掲示板の設置等
・その他の具体的な活動

3．助成対象者

まちづくりグループであって、次の要件を満たすもの。

(1) 上記２の対象事業に該当する活動を行っていること。
(2) １０人以上の構成員を有すること。
(3) 政治、宗教、営利を目的とする団体でないこと。

4．対象経費

対象となる経費は、次のいずれかに該当する経費とする。

(1) 活動を行うのに必要な経費
（材料費、機材購入費、資料代、通信費、会場借上料等）
(2) 活動に必要な講師や専門家の援助に対する謝礼等
ただし、（ア）飲食を目的とする経費（イ）団体の管理運営経費　を除く。

5．助　成　額

１件当たり２０万円を上限とし、本年度の助成金額は１００万円。

6．手　続　き

(1) 申込み
４月上旬～５月上旬までの期間に、当センターに交付申請書を提出する。
(2) 審査及び交付決定
審査委員の審査により決定することとし、助成団体に交付決定を通知する。
(3) 助成金交付
上記の決定に基づき、助成団体の代表者の口座に助成金を振り込む。
(4) 実績報告及び成果発表
実績報告書の提出と併せて、成果発表会における事業の実施内容の報告を義務付ける。

詳細につきましては、一度センターまでお問い合わせください。

問い合わせ・申し込み先

財団法人えひめ地域政策研究センター
〒790-0003　松山市三番町四丁目10-1　愛媛県三番町ビル２階
TEL　089-932-7750　FAX089-932-7760　E-mail info@ecpr.or.jp

Information センターからのお知らせ

平成16年度　ホームページ作成講習会の開催のお知らせ

当センターでは、愛媛県の委託を受けて、地域づくり団体を対象として「ホームページ作成講習会」を開催することになりました。

そこで、地域づくり団体の中で、今後自分達のホームページを開設して、地域から情報発信をしようと考えている方々の参加をお待ちしています。

■開催時期及び場所

○6月下旬から7月上旬の　土曜日と日曜日の2日間（予定）

○松山市内（昨年は愛媛県生涯学習センターパソコン演習室で開催）

■内　容

○パソコンが苦手は方でも2日間の講習で、ＨＰ開設ソフトを使って所属する地域づくり団体のＨＰが開設できる実践的な講習会です。

■募集人数及び応募資格

○県内の地域づくり団体関係者（5団体程度）

○１団体２～３名程度の参加とします。

○受講料は無料です。

■応募方法と締め切り

○直接又は市町村、関係者を通じて、必要事項を記入（様式自由）の上、申し込みください。

○６月９日（水）

問い合わせ・申し込み先

財団法人えひめ地域政策研究センター

〒790-0003　松山市三番町四丁目10-1　愛媛県三番町ビル２階

TEL　089-932-7750　FAX089-932-7760　E-mail info @ecpr.or.jp

BOOK　INFORMATION

●今治城見聞録　　アトラス出版　１,５００円

2004年は今治城と今治の町なみができてきてから400年になる記念すべき年です。この400年を祝して今治城築城・開町400年祭が開催され、今年一年さまざまなイベントや事業が実施されます。そのような中、400年祭実行委員会から記念誌「今治城見聞録」が今年１月に発刊されました。今治城や築城当時の町なみの詳しい考察、藤堂高虎の生涯、今治城築城前後の歴史や藤堂高虎をとりまく武将列伝、藤堂家の後江戸時代末まで今治を治めた久松松平藩の時代、近代の今治まで幅広く深く取り上げた内容となっています。

目次より

- 今治城探索
- 今治城古地図散歩
- 今治の町割
- 今治城跡探検
- 藤堂高虎物語
- 久松松平家の時代
- お殿さまのアート
- 今治の画人たち
- 今治藩政トピックス
- 藩政人列伝
- 近代の今治
- 今治歴史略年表

「地域づくりコーディネーター育成研修会」
受講生募集

☆県内各地から地域づくりリーダー等の受講生を募り、コーディネーターとしてのスキルの向上を図るためワークショップの手法を学んだり、研究フォーラムを開催して、企画・運営に携わることができます。
☆研修生同士はもとより、講師、センター関係者等を含め、将来にわたる幅広いネットワークの構築を図ることができます。

■研修期間
平成１６年６月から平成１７年１月頃までの間で、年間６回程度の開講を予定しています。

■内　容
ワークショップ中心のプログラムで、現地研修を含めたより実践的な研修にする予定です。

■募集人数及び応募資格
○ １５名
○ 地域づくり団体のリーダー等

■応募方法と締切り
○ 直接または市町村、関係者を通じて、当センターまで申し込んでください。
○ ５月１３日（木）
○ 受講料は無料ですが、研修会場までの交通費は自己負担となります。

（お問合せ・申込先）
財団法人　えひめ地域政策研究センター
〒790－0003　松山市三番町四丁目10番地１　愛媛県三番町ビル２階
TEL 089-932-7750　FAX 089-932-7760　E-mail: info@ecpr.or.jp

常務・統括部長
☆丹羽　由一
（日本政策投資銀行）

後列左から　研究員　梅村　裕治（津島町）　研究員　☆清水　和繁（全農愛媛県本部）　研究員　☆鵜野　大作（四国中央市）

前列左から　事務員　☆谷下　美里　専務・所長　白石　春美　主任研究員　☆井石　憲雄（愛媛県）

― 春は移動の季節です ―

平成16年度、えひめ地域政策研究センターのまちづくり活動は、左記のスタッフで行います。（☆は新しいスタッフです）。

昨年まで、当センターで勤務していた、脇、山下、橋岡、奥山、のスタッフ４名は４月より、それぞれの出向元に帰りました。これからもセンターOB、客員研究員としてよろしくお願いします。

七七号の「こどもの視点でまちづくり」から今号（八〇号）にかけて、視点シリーズということで特集を組んで参りました。みなさんはどのような感想をお持ちになったでしょうか？

地域にはいろんな世代、いろんな考えをもった方がたくさんいます。私もこの四月より地元の役場に帰ります。これからは、いろんな視点で物事を考えていけるよう努力していきたいと思います。

（S・O）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

内容についてのご意見やまちづくり活動のトピックなどありましたら、お気軽に『舞たうん』編集係までお寄せください。

〒790-0003
松山市三番町四丁目十番地一
愛媛県三番町ビル二階
(財)えひめ地域政策研究センター
まちづくり活動スタッフ
TEL089(932)7750
FAX089(932)7760

発行／平成十六年四月十日
(財)えひめ地域政策研究センター
印刷／三創印刷株式会社

☆http://www.ecpr.or.jp　☆E-mail:info@ecpr.or.jp
本紙は、(財)愛媛県市町村振興協会の委託を受けて発行しています。